

Title	伊藤清司著, 『サネモリ起源考：日中比較民俗誌』
Sub Title	The origin of SANEMORI (実盛) legends : a comparative study between Japan and China written by Seiji Ito
Author	桐本, 東太(Kirimoto, Tota)
Publisher	三田史学会
Publication year	2002
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.71, No.4 (2002. 11) ,p.145(623)- 149(627)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20021100-0145">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20021100-0145</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 伊藤清司著『サネモリ起源考——日中比較民俗誌』

桐本 東太

本書は「日中比較民俗誌」という副題の示すとおり、日本全国の農村部でかつて行われてきた虫送りの起源と沿革について、比較研究の立場から考察を加えたものである。サネモリとは斎藤別当実盛のこと、はじめ源義朝に仕えたものの、彼の死後は平宗盛をあるじにいただき、木曾義仲が勢力を伸長しはじめた時、高齡をおして出陣し、あえなく篠原で戦死した武将である。死後、彼の怨霊がウンカと化し、水田に実るイネを片端から食い尽くしてゆくのだという伝承が、特に西日本では広く流布してきた。著者はこのフォークロアを博搜して、中国江南部の虫送りとの間に著しい類似が認められるとの結論に達している。

それではその類似点とはどのようなものであろうか。一つには、イネの天敵を死者の怨魂とみなす観念であり、

しかもその死者が軍人であったことである。すでに述べたように、「実盛とはむしろ縁もゆかりも無さそうな西国にサネモリの名が偏在している」(一二二〜三頁)のであつて、こと日本国内に限ってみれば、「サネモリの民俗は本土の西の地方で成立したのではないかと考えられる」(一四二頁)のである。そして「西の地方」をさらに国外に向けて延長してゆけば、そこには中国の虫送りが存在している。中国では、ウンカからイネを守る守護神、つまり「驅蝗神」として劉猛將軍をはじめとする複数の軍人が信仰されており、しかも彼らは「みな何らかの意味で戦争に関係があり、しかも自刎、自縊、投身自殺など、非業の死をもつて果てている点が注目される」のである(一五三頁)。言うまでもなく、ウンカの化身となったサネモリと、害虫を滅ぼす神様では、その

立場がすっかり逆転しているが、著者は中国の場合、「現行の話とは因果関係が逆の内容が本来の伝承であったのではないか」との仮説を提出し、その例証を豊富な民俗事例の中に求め、避邪の神から、災厄の根源として石もて追われる立場に変化した方相氏などを同類として挙げている（一五五頁）。伊藤氏独自の明晰な文体から、私もふくめ、読者は何となく納得してしまふような行論であるが、「軍人の神格化」は本書のタイトルのサネモリとなつて結実しているほど、著者の問題設定の中では重要な比重を占めており、比較民俗学にあまり深い同情を示さない研究者の中からは、この点について、厳しい立場を選択する人が出てくることも予想される。

しかし、私は必ずしも著者に反対の立場を取らない。なぜならば虫送りをめぐる日中の類似は、信仰の問題のみにとどまらないからである。さらなる類似は虫送りの実際にある。「わが国の虫送りの旗幟類のうちで、特に気になるのは、やたら旗や幟の多いこと、ことさらに大きい旗や長い幟の登場することである」（九二頁）。これは「江南地方の驅蝗習俗に、旒や幟の類とともに手に手に紙の旗を持ち、大勢で喊声をあげる集団示威行動があった」ことと相当な連関を示している（一〇五頁）。

さらに日本では、「虫送りに、鉦・太鼓・法螺貝などの鳴り物のほかに、鉄砲を持ち出すところが少なくなかった」（二七〇頁）。これも著者が再現した江南の虫送りの状況と酷似している。言うまでもなく、ウンカが轟音を聞きつけて、恐れおののきながら四散するのであれば、これは害虫の駆除については極めて有効な方法であつて、日本と中国でことさら類似があつたとしても、何ら怪しむには足りない。ところが「ウンカ類には形態的な聴覚器官がなく、音そのものに反応する性質をもっていない」のである（二七五頁）。つまり空中にとどろく大音響も、文字通りの「空砲」であつたといえる。とするならば両者の類似をただの偶然と片付けてしまうのは、軽率にすぎよう。なお著者は、日本の虫送りで鉄砲を使用したことについて、これが支配者階級に対する一種の示威行動としての意味を持つており、虫送りに対する一種の示威運動の意味もあつたことを指摘している。保坂智氏の近著『百姓一揆とその作法』（吉川弘文館、二〇〇二年）によると、江戸時代の百姓一揆は、竹ヤリ一本で武士になで切りにされるといふ、従来の悲惨なイメージとはことと変わり、基本的に農民側が要求したことを、武士階級は受け入れたらしい。虫送りの鉄砲で年貢減免の要求を

たたきつけるところも、保坂氏の百姓一揆像と、微妙に重なり合うようで興味深い。農民はそれほど弱く、しいたげられるばかりの存在ではなかったということであろう。伝播のレベルで考察することではないが、伊藤氏も本書で縷々述べられているように、中国の虫送りもまた、何らの組織づけもなされずに、散発的に行われたのではなく、その背後には、たとえば青苗会といった農民のグループが整然と組みあげられていた。中国の農民が虫送りを挙行した動機をすべて、害虫駆除のみに帰してしまつて良いものかどうかは、考慮してみる余地のある問題であろう。

さて最後に著者が挙げている日中両国の類似は、科学的な害虫の駆除法である。つまり水田にアブラを流し込み、一方でイネについたウンカをその油膜の上に払い落とすことによつて、ウンカを窒息死させるといふものである。著者はこの点については、他の可能性を留保しながらも、中国農書からの文献レベルでの撰取の可能性が高いと推測している。妥当な見解であろう。

以上、簡単に本書の内容を紹介してきたが、私自身の立場から、二点ほど問題提起をしておきたい。一点目は「地域」、二点目は「時間」に関わることがらである。

まず第一点は、最初に紹介したように、虫送りとサネモリを関連づけるフォークロアが、西日本のみにみられる現象であることと関連する。我が日本列島における歴史の展開が、フォッサマグナあたりを境にして、ごく大まかに東と西に分岐することは、すでに諸家によつて指摘されてきた（たとえば網野善彦『東と西の語る日本の歴史』、そして、一九八二年など）。サネモリは虫送りという習俗をもとにして、こうした東西の区分論の一つの証左を与えたものといえるが、佐々木高明氏によると、この様な東西の差異は古く縄文時代にまでさかのぼり、西国は照葉樹林文化圏として中国の江南地方に接続し、東国はナラ林文化圏として北アジアに連なる様相をみせるといふ（『日本史誕生』、集英社、一九九一年）。

佐々木氏の所論も一つの問題提起にすぎず、しよせん定説とは呼べないかもしれない。しかし私がここで問題にしたいのはハイヌウエレ神話と縄文土偶を結びつける吉田敦彦氏の見解である。ハイヌウエレとは言うまでもなく、殺害されてその死体を解体されたあと、屍の各部分から、様々の食物を生じさせた女神である。吉田氏はインドネシアで採集されたハイヌウエレ神話をあげ、それがバラバラにされた縄文土偶の姿と対応すると指摘す

る。すなわち土偶の破片の背後には、死体化成型穀物起源神話が横たわっているとの仮説を提示したうえで、この観念は『古事記』にみえるオオゲツヒメの姿にまで受け継がれていると主張されているのである(たとえば『昔話の考古学』、中公新書、一九九二年など)。

私は比較民俗学の専門家ではないので、いささか印象的な批評に傾くことをお許しいただきたいが、インドネシアの伝承をひとびに縄文時代にあてはめるのではなく、伝播の立場を取るのであれば、特に縄文時代の列島が、強い文化的インパクトを受けたとされる、西日本から江南につながるルートを軽視するべきではあるまい。つまり論証のひとコマとして、かつて大林太良氏が試みられたような(『稲作の神話』、弘文堂、一九七三年)、中国南部にハイヌウェレ型神話の痕跡を追い求める作業が必要であろう(また西日本より遺跡の分布が稠密だという事情を勘案しても、ごく大まかにみて、北アジアに連なる文化伝統を持つ東日本でより多くの土偶が発見されていることは、やはり無視できない問題ではあるまいか。まして吉田氏は、東日本における土偶の事例を頻用される傾向があるのだから、この点について、何らかの説明があってもよからう。ただし私の主張は、東日本の

縄文文化に対する、南方の影響を何ら否定するものではない)。

さらに重要なのは、仮に破碎された縄文土偶の無残な姿を、ハイヌウェレと重ね合わせることができるとしても、それがさらに、大陸から文字を受容し、文化の様相も前代とははるかに異なる形をとり始めた『古事記』の時代にまで、何らの資料批判もなく延長できるのかという素朴な疑問である(例えば佐原真氏は『考古学つれづれ草』小学館、二〇〇二年、一七三頁で、縄文と弥生の間横たわる、劇的な信仰上の変化について言及されている。ハイヌウェレ神話の「変遷」を考える際にも、傾聴すべき見解である)。これはそもそも、縄文時代と『古事記』の時代に、現在採集されたハイヌウェレの神話を無媒介に接続させて良いかどうかという問題に連なってくる。要するにここで私が新たに主張したいのは、比較民俗学的研究における「時間」の問題である。従来、民俗あるいは説話や神話の比較の立場をとる研究者に見られた強い傾向の一つは、比較の素材を現在の資料に求めながら、そこに浮かび上がる類似点の淵源を、ただちに古代に帰結させようとする強い衝動であった。しかしこうした情念は果たしてどこまで学問的な妥当性を持つ

のであろうか。『サネモリ起源考』はこの様な問題について、強い警鐘を鳴らした書物であるともいえる。

私の問題提起は、なだらかに二点目へと収斂してきた。つまり「民間習俗のつねとして、虫送りもいつ、どの地方で、どのようにして生まれたか具体的に知る由もないが」(五六頁)、「十七世紀後半ごろから虫送りが次第に全国に普及し始めているから」(二九九頁)、この習俗が中世、まして古代にさかのぼる可能性は皆無である。要するに本書は、近世にいたってはじめて日本に伝播したとみられる民俗を扱っているものであり、この点に伊藤氏による今回の研究の最大の意義があると、私は考えている。著者が強調するように、「時代による多寡の違いがあったにしても、この列島と大陸の間には人の往来がまったく途切れるということはなかった」からである(三一五頁)。

しかしこの点は、長年比較民俗学の研究に携わってきた著者の研究にも直接跳ね返ってくることは否めない。たとえば著者による比較説話学研究の記念碑的な著作として、『花咲爺』の源流』(ジャパン・パブリッシャーズ、一九七八年)を挙げるのに、異存を唱える人はあるまい。そして「揚子江沿岸および江南地方の先史古代の

日本にたいする意味は決定的である」という谷川健一氏の解説に端的に示されているように、この書物の視線は、我が列島の古代に向かって熱く注がれている。しかし今、同じ著者による『サネモリ起源考』は、『花咲爺』の源流』で検討の対象とされた各説話、つまり「絵姿女房」「花咲爺」「犬の穀物招来伝説」といった各種の話型が、日本の説話文学史上、一体どの時点ではじめて登場したのかという点をめぐってだけでも、再検討を要する事態を到来させたと考えられる。その意味で本書は、伊藤比較民俗学の一つの到達点であると同時に、新たな出発点であるともいえよう。幅広い読者に、一読を請いたい著作である。

(青土社、二〇〇一年一〇月、三四五頁)